

平成二十八年

正月 旭 智史、真美来る、立派なお腹

妊婦みて年始の席の喧（かまびす）し

一昨年五月急逝したギター仲間の奥様から賀状

喪の明けて奥方の名の賀状かな

大倉山 日常の中の正月

爺婆と孫との別れ？

あつという間漏れ来る声も三日はや

眼鏡取りプールの賀詞も丁重に

豆腐さへ上物求む松の内

一月一七日センター試験、一八日初雪

初雪やチェーンの破る夜の無言（しじま）

天も慈悲試験の翌（あした）雪の朝

一月二二日 新年会、九州から木村ご夫妻

新年会遠来の顔見ゆ心満つ

一月二五日頃、最大級の寒波 蕪崎零下九度五分

朝富士の傘雪纏ふ大寒波

ジム仲間と鮫鰯一匹喰い尽す

鮫鰯を丸ごと吊るし鍋仲間

旭 早朝散歩

畦道の芹の芽を摘む素手をもて

早春の野は貧しきか雀群る

春は近い

五日とは続かぬ日和春隣

梅園や畑の梅も剪定しすぎ

剪定に花整ひて畑の梅

三桮の花円に月明かり

二月二十七日、富士山に入り日　ダイヤモンド富士

梅東風や入り日は富士に迫りをり

二月二十七日　大倉山梅まつり

尋常でなき人の波梅見茶屋

おもいのまま如何なる丈や汝梅

丹沢の雪が解けるのも淋しい気分

時行くは惜しや端山の雪解けて

大倉山　春

密やかに内裏雛居る茶器の脇

朝散歩視線に揺れて山笑ひ

花付きに何を占ふ花辛夷

荒れ畑の土筆の丈はそれぞれに

擗若葉梢の先の輝けり

三月二十一日裾野山荘

山椒の胡麻粒程の芽を試し

青磁鉢散る初むまでの雪柳

三月二十六日　前期は神奈川大学
オープンキャンパスを見に行く

キャンパスの桜は三分母娘ゐて

四月二日　水再生センター桜並木オープン

今日のみと桜に誘ふ木戸を開け

四月六日　港北高校入学式

スカートの襷も鋭利に新入生

旭付近

田水張る泥の轍は国道へ

四月二十八日 咲子

手鞠花冴へゐて雨の野辺送り

樟若葉代渡す葉の清しき香

圈央道

山の際田の脇二本桐の花

五月五日

菖蒲湯を立てても静か二人の家

蒼天に亡父の声聞くこどもの日

六月二日 明治神宮吟行

百年の梢競ひて樺大樹

日盛りや明神鳥居の陰跨ぎ

楠若葉異国の人のさんざめく

紫の諧調の風花菖蒲

六月十九日 友と東京散歩 青松寺山門前

捩花の右へ左へ咲き上る

六月二十七日 裾野

荒れ庭の夏の便りは半夏生

青山椒房摘む指に鋭き香

梅雨寒やニュースは株の大暴落

咲き溢（こぼ）こぼる金糸柳や梅雨深し

紫陽花をばさりと切りて硝子鉢

七月四日旭 政夫君の菜園

かなぶんの喰ひ残したる菜っ葉茹で

マンシヨンのロビー

願纏ひ七夕竹の香り立つ

七月初め暑い 中里さんち

ともかくも入って閉めろと主汗

夕立やアニメの傘を借りて辞し

横浜花火大会

遠花火やがて煙に隠れけり

サングラス浴衣の帯にはさみゐて

母 新盆で旭へ

アクアライン 房総に積乱雲

峰雲の暗き底へと道の伸ぶ

霊棚の母は伏目にほほえめり

八月二十日 裾野

百日紅十五年経て咲き揃い

空蟬の連なっている枝のあり

夏の雨箱根の山は光満ち

八月二十八日 泰元より葡萄

片仮名の葡萄は皆味の似て

九月八日 台風来襲の朝

まなじりを決し野分へ登校児

九月十四日 スーパームーン

満月の辺りを圧しゐ出しかな

鶴見川近辺

自転車やしおからとんぼ懷に

蛇行せし川に朝霧潮満つ日

法師蟬逃がして吾に翅の風

日の射して葛の裏見の流れかな

我が天下草刈り後の彼岸花

秋に向かう 朝顔三句

清閑と言はれ朝顔数へをり

コーヒーの香や朝顔も数の減り

朝顔の実に色紙の標（しるし）付け

初秋刀魚煙も箸にも頼りなく

十一月二十四日 五十四年ぶりの十一月の雪の日

川面より霧の立つ見ゆ重き空

十一月二十五日 足柄SA

山峡（やまかい）は緋に緋模様斑雪

裾野

金色に命を残し芒原

年々に増える万両刈り難く

人住まぬ庭に詫び助咲きてあり

実南天含む雨粒輝きて

シヨウビタキ何も語らず長居して

清掃局前の櫨並木と河川敷

櫨紅葉並木を逃げて河川敷

散り敷いてなほ盛りなり緋山茶花

十二月一日朝刊案 第百十三元素名称決定

ニホニウム周期の表へ今日師走

化学の徒は周期表のマスを連想するのである

ニホニウム場所定まりておでん鍋